affilizione―アッフリツィオーネ―

茂間ふみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ａｆｆｉｌｉｚｉｏｎｅ―アッフリツィオーネ―

【Ｎコード】

Ｎ２８００Ｄ

【作者名】

茂間ふみ

【あらすじ】

和田家５姉弟と謎の美少女。愛と血に苦しむこの血は・・・。

zelosol　Anri―双葉―（前書き）

和田家の一族、長男長女の双子。仲良く学校に通っている様子だけど？

ｚｅｌｏｓｏｌ　Ａｎｒｉ―双葉―

ガヤガヤ
　　ガヤガヤ

やっぱり休み時間や放課後はうるさいな―と和田安里は思った。

「ねぇ千里！さっさとやってよ！あたしが帰れないでしょっ！」
となりのクラスから誰が聞いてもムカつく声が聞こえる。

万屋夏菜子―ヨロズヤカナコ―可愛い名前も無駄で、顔も中も学校一悪いアイツの声。

万屋夏菜子は隣町にある高級ホテルを運営している父親がいるから、学校一お金持ち。―安里達の家を除いて。

「夏菜子！何やってんのよ！また千里に漬け込んで！自分でできないお嬢様ぶってるの？バカみたいね。」
夏菜子にいってやった。夏菜子は固まってる。

「安里、いいんだよ。男だから、僕は。」
千里―双子の弟である。
優しすぎてバカだ。呆れるぐらいに。

そして―ちっちゃくて。
小六だけど、１３２・・。

私１６６。なんでだろう？
可愛いからモテる。本人は気付いてないみたい。馬鹿にしている訳ではない。

「帰ろう、千里。」
万屋夏菜子を見ているとイライラするので帰る。

「ねぇ、安里。僕たち全然似てないよね。もしかして僕拾われた子とか？あははは。」
「そんなことないわよ！だって私はママ似で、千里はパパ似なだけだよ！・・身長以外はね。」
「そっか。でも差ぁヒドイな。僕、小学校卒業まではせめて５センチ差になると思ってたのに。その小学校卒業が来週だもんなぁ。」
身長には差があるけど、私達には切っても切れない縁がある。多分きっと・・。

ねぇ千里？
覚えてないかもしれないけど。
私がつけているヘアピンと鍵ネックレスは貴方がくれたんだよ。これも
「つながり」だよね。

私は貴方を立派な人って思ってる。
弟とは思わない。
だって、一人の人だもん。

身長は確かに私の方が高い。
成績だって少し、私の方がいい。

でも。イヤガラセなのににこにこできる千里。
私以上に
「立派な人」な千里。
私はそんな千里みたいな人になれるのかなぁ。

zelosol　Anri―双葉―（後書き）

優しい千里の身に、なにが起きる！？次回は双子編の主要人物が沢山出てきます。

zelosso2　Senri―変化―（前書き）

いよいよ、双子編の主要人物が出揃います。千里の友人とは？謎の美少女・イズミと父親・惣司（ソウジ）の関係とは！？

zelos02　Senri―変化―

「千里ー朝だよっ！早く早く！」

安里の声だ。
結局身長は伸びなかったし、成績も少し安里の方が上だ。ちなみにすぐ下の妹・樹里よりも僕は小さい。

「ふぁぁああ・・。そうだ、今日卒業式！自覚ないなー。」
今日で慣れ親しんだ小学校ともさよならだ。

「セ、千里。」
万屋さんだ。いつも僕はこきつかわれる。今日はなんだろ？肩もみとか？

「あ、あは、もう卒ギョネ、こ、これあげるわ、喜びなさい、オヘヘヘ・・。」
混乱とはこのコトだなぁ。
くれたのは、小さな花束。僕はもらった弾みでメッセージカードを落としてしまったそう。気付かなかった。
のちに、これは万屋さんの告白だったことを後でしる。

今～こそ～別れめ～
いざ～さら～ば～

グスっグスっ・・。

またな！

今度いつ遊ぶ～？

ほとんどは笑っている。多少は泣いてる人もいるけど。
やっぱり、みんな公立にいくから、別れに実感がないんだろうか。

僕も、軽く思ってた。
中学が運命を変えたコトを知るまでは。

「安里ー！早くー！」

「・・・今日から中学生・・。初めての電車通学、初めての別学、初めてづくし、よね。」

「そうだね。」

入学式が終わって教室に入り、仲良くなった、アツシこと村田アツシ、ソウこと山田颯太（ソウタ）で話していた。

「おっし！昼のチャイムなるまで自由時間！」
担任の円山太郎先生（３１）がいった。

「なあ、アツシ、お前姉さんいるんだって？」
ソウが言った。
「いるぜ。頭悪いけど。千里は？」
「双子の姉がいるよ。多分しばらくしたら来ると思う。約束したから。」
『わっひょー！』
2人はなんか喜んでいる様だ。
「な、なんだよ・・。」

ガラッ
凄い大きな音がして、女の子（大体はギャルっぽい）が入ってきた。
『ねぇ！名前なんて言うの？教えてー！！』
「村田アツシ！よろしくな。」
「俺は、山田ソウタ。〈颯太〉って書いてソウタな。」
「・・あ。僕は千里ね。アハハ・・。」

「千里クーン！こっち向いてー！」

「え？」

☆カシャ☆

『キャーちょうだーい！』

「メアド教えてー！」

「千里クンって結構女子部で有名だよ～！」

乗り気な2人狙いではなく、僕だったの？2人ともカッコいいのにな。

「ねぇ、安里知らない？和田安里？」

「さぁ～？成績良さそうだったからミンナで学級委員やらせたから、先生といるんじゃなーい？ぜったーいインテリっぽいしぃ～！千里く～ん、なに？アイツ狙いなの？やめなよ、フ・ツ・リ・ア・イ！だっての！」

『キャハハハ！ミナミナイス！』

ぶっちゃけ、引きます、あなた達。

ガラッ！！

ミナミさん達よりも、大きな音を立てて扉が開いた。

「ちょっと来て。」

手首を捕まれ、女の子とは思えないような力でひっぱられた。

「エー千里クン行っちゃうのぉ？ならイイ、コイツラきょーみナイもん！いこっ！」

バタバタ・・。

ミナミさん達も教室から出てく。

「なぁ、ソウ。アイツらなに？それより千里いきなり告られるのか？いいなーあんな美女！」

「え？オレはさっきの女の子達の方が好みだけど。」

バタバタ！

「あの！あなた達、千里と仲良くしてたよね？」

「おぅ。千里は愛のコクハクされに行ったよ。・・てか、君も千里狙い？いいねー千里クンは。なぁ、ソウ。」

「私は千里の姉ですけど。」

『え！？似てない！？二卵性！？』

その美女は屋上まで引っ張った。やっと手を放した瞬間
「アンタ和田惣司の息子よね？そっくりだものねぇ？え？」

凄い形相で睨んできた。

よくみれば、美女は個性的な格好をしている。

この学園では、女子にリボンタイの制服が人気のはずなのに、ネクタイだし。多分女子だけみればこの人だけ。
それに、歩いたら見えそうなぐらいスカートが短い。
さらに美女は驚くことにまっすぐな金髪・青い目・白い肌。だけど日本人の顔。すごく、スタイルがいい。身長は安里（１６６）よりも大きい。１７０ぐらいだろうか？

美女は
「取り乱してごめんな。オレは牧原和泉（マキハライズミ）だ。・・お前も顔が気になるか。ハーフだ。」

「あ、ごめん。僕は、千里。和田千里。牧原さ―」

「そんなのしっている！！」

「え―・・。」

「お前は、自分の父親が犯した罪を受け入れる自信はあるか！？オレが聞きたいのはそれだけだ！」

「・・そんな」

「言え！」

「・・わかった。・・・・父さんがなにをしたかは知らない。でも受け入れたい！生きていれば多分知る事だろうし。なら、今聞きたい。」

「わかった。お前の父親は―」

「何？」

父さん。

何でそんなことしたんだよ。

涙でるじゃんか。はは。

父さんは一人の人だ。

だけど父さんは一人を人として見てきたのかなぁ？

zelosso2　Senri―変化―（後書き）

いよいよ、次回はカギとなるイズミと惣司の関係が明らかになります。

zelosos3　izumi―黒幕―（前書き）

いよいよと謎の美少女・和泉との関係が解かれます。

オレ、最低だ。
罪のないヤツを責めている。

コイツじゃなくて、コイツの父親が悪いだけなのに・・・。

でも最低最悪なオレは、勝手に口が動く。

「お前は、自分の父親が犯した罪を受け入れる自信はあるか！？オレが聞きたいのはそれだけだ！」
と。

和田千里は、わかった。受け入れる。と答えた。

驚くだろう。オレなんかと、

異母兄妹なんだから。

「お前とオレは兄妹だ。」
あっちは驚いている。当たり前だが。

「母親―まりあ―と、お前の父親―惣司―は同級生だった。中学からの親友だったらしい。お前の父親が関係をぐちゃぐちゃにした。」
空気が重い。

「惣司君、なに青くなってるの？寒いよ、早く教室に入ろ？」

「なぁ、まりあ・・。聞いてくれるか？ハハ・・。
オレ、オレ・・あんなに尽したのに、あんなに尽したのに・・っ！
！ぅわあああ！！何で！フラれたんだあああ！！」

「・・惣司君のよさを分かる人が、きっとあらわれるわ。絶対！それに女の子はたくさんいるわ・・。」

「・・女の子、たくさん・・・・・・」

『聞いて聞いて！彼氏できた～。なんとあの和田君！
医学部の超イケメン！入学以来ずっとミスターの！』
『アレはやめたほうがいいよ・・。相当のプレイボーイだよ。いい噂聞かないじゃん。』
『え～本当？なんかショック～。』

「最近、みんな惣司君の悪口ばかり。」
私は昔から、惣司君が好きだった。

金髪のロング。しかも軽めの天パ。自毛なんだけれど。
やっぱり中学の先輩達に目をつけられていた。
誰もかばってくれない。
先生にも見放され、友達は離れていった。

ある日、いつものようにイジメを受けていた。

カシャッ・・

あれ・・カメラのシャッター音。先輩は気付いてない。

「ヤバくナイ？ウチら見付かりそうナンダケド。コイツのせいで！」

「コイツ、自慢気にスーパーロングだし。」

・・

「切っちゃえ！オラ！」

ドン！

カシャカシャカシャ

ザキザキ・・

次の日。やけに雨が激しかったな。

ガヤガヤガヤ・・。

校内新聞ニュースが出たのかな？

職員室前にみんな集まってる。

「あ・・」

「本人のゴトウジョウじゃん。」

校内新聞ニュースが出ていたけどその内容は私へのイジメレポート。

「牧原さん・・だよね？時間あるか？」

新聞委員の和田惣司君。

顔と頭がいいし、クールなのにスポーツも出来るからモテてる人。

「あれ貼ったのオレだから。」

「え・・。」

「この学校イジメないので有名だったのになぁ～。兄ちゃんが言うには。正義感っぽいのが先に動いちゃった。・・ごめんな。」

「ううん、助かったよ！ありがとう！」

これ以来好きだったのに。クールだと思ったら、意外に熱い貴方に。

―5ヶ月後―

すっかり惣司君への思いは消えて、まったく話さなくなった。あっちは何も言わない。

4ヶ月前から告白されて、彼氏がいるし。

最初は迷ってたけど、今は彼の事が好き。そんな時、

「まりあっ！今日飲みにいかね？オレいいトコ見付けたんだけど。」

「・・あるの？大丈夫かなー。」

「わぁ、本当だ。すごくお洒落！惣司君が見付けたなんて信じられないぐらい。」

「最後は余計。」

私達は、昔に戻ったように、他愛のない話しばかりしてた。

戻ってない。

「まりあ。聞いてくれるか？」

「何？改まって。」

「オレ、やっと気付いた。お前のコトが・・・・」

沈黙。

「好きだ。」

あれで私の中から惣司君への思いがぶわっとまた出てきて。
理性が欲を押さえられなくて。
ウワキに走ってしまったんだ。

RRR・・RRR・・
ガチャっ
「あ、惣司君？山にドライブ？いいね！行こう！」

「山は植物が綺麗だね。・・あれ？雲行良くないな。大丈夫かな？」
「・・・。」
「惣司君？」
ポツ。ポツ。
ザアアア！！
急にひどくなった。なんで？
―台風並の激しい嵐に――ザー――・・

「ねぇ、帰・・」

ガッシャン！！

え？ドアが開い・・てる。

まさか、ガケから落ち――

「イヤアアアアア！！」

目が覚めると、病院だった。

「惣・・司君？」

「オレは軽傷ですんだ。・・もうお前とはお別れだ。」

「な・・なんで？」

「オレには、恵子がいる。」

「・・は？」

「恵子・・妻だ。心配させたくなかったから、仲がよかったお前と関係を持った。

―知らないけど、本気になっちまった。本当は夜逃げしようとした。

――もう目が覚めた。オレは妻と子供達のモノだ。

――ほら金。一億。十分だろ？お前は生きるのがやっとだそうだ。

――じゃあな。」

――アッチモヨクノタメニ？

コレハバチ――――？

「うわぁあああああああん！！」

私にはもう何も残ってない。

3時間ぐらいたったのかな？

「ｍａｍａ？」

「まりあ、貴方ガケの下で発見されたって。まさか自殺・・したの？」

「――そうだよ。成績がビリになって絶望しちゃったから。」

「・・今言わない方がいいかもしれないけど・・貴方お腹に子供いるんですって・・。」

「なんとか中の子無事ですって。でも危険だから。

――なんで気付かなかったの？その前にあなたきたの？独り暮らし始めるまできてなかったわよね？」

１９でこないのは初めてだ、と医者に言われたぐらいだから。

「独り暮らし始めた日にあって・・運命かな？まだ2年もたってないから、不安定なだけだと思って・・。」

扉が開いてる。・・あ、ｐａｐａ。

「でも生みたいの。

・・せっかく生きててくれたから。」

「そのあと、オレを生んだ母親は体が弱くなり、病気にかかって死んでしまった。

祖父母が引き取ろうとしたが、お前の父親が存在を隠す為に施設に無理矢理オレを入れた。認めたくなかったんだろう。

オレはお前の父親が許せない。オレを妊娠させたことじゃない。事故を起こしたことでもない。

お前の父親が、母親を捨ててのうのう生きようとしたこと。そしてオレの存在を隠す――認めないこと。」

「・・知らなかった。なんで君は僕だけに・・話したの？」
和田千里はショックを受けたのか、床にぺたんと腰をおろした――抜けたみたいだが。
「じゃあな。オレは行く。」

「あっ、待ってよ！」

逃げるようにはや歩きで屋上から去った。

ユルサナイ。

貴方ダケ幸セナンテユルサナイ。

――ネェ、イズミチャン？

・・まりあ。アンタはオレの夢に出てくるけど、何が言いたいんだ？

フフフフフ・・

zelosos3　izumi―黒幕―（後書き）

次回は安里の心に変化が・・？

zelos04　Anri―友達―（前書き）

安里の友達、未沙はみなみとも関係を持ってた・・

zelos04　Anri―友達―

「あーんーりー！ここ分かんねぇ！」

「え？ここはね・・」

入学式から早1ヶ月がたった。
私は、岡月未沙―オカツキミサ―と一番仲がいい。今もお弁当を一緒に食べている所。
未沙はいかにもギャルで、中も見た目通り。
友達と言えば、部活で矢川小明―ヤガワアカリ―とも仲良くなったけど、小明は人気者だし・・。

「安里？安里ィ～。」

「んっ、何？えーっ！」

高校生？らしき人に囲まれてた・・。

「おっ未沙！ん？・・何この女。」

嫌な予感がする。この人達高等部っぽい制服着てるけど、違う。校章がないし・・。

「んじゃあねぇ～、クラブいこーっ！
あ、コイツ安里～！」

怖い。

未沙が未沙じゃないみたい。

「やっ！」

気が付いたら、逃げ出してた。

結局ギリギリで授業に間に合った。

「明石みなみ！また遅刻かっ！」

「うるせぇなぁ～。なんでもいいだろ！」

その後、順調に授業が終わった。

チャララリーン♪
チャララリーン♪

「うまくいってる？和田安里しばき。
・・アイツおとなしそうな顔してるクセにやり手！いつも千里クン待たせて一緒に帰ってんの！！超ムカつくんですけど！」

「みなみ、実はあいつね・・イタイ目みてもらおうゼ★」

「お疲れ様！小明！」

「お疲れっ！・・あんまいいたくないんだけど、安里、今日ちらっと聞いちゃったんだよね。」

「何を？」

「岡月さん、安里のことあんまよく感じてないみたいだよ？」

「えっ、未沙が？まさか～！」

「そうだよね！

・・そういや明石先輩とどーなった！？」

「―先輩、彼女いるんだって・・ハァ。」

「そっか、あ、でも安里なら大丈夫だよ！」

「アリガト。じゃあまた明日ね！バイバイ！」
明石先輩は私の好きな人。６月の試合が終わったら、フラれる覚悟で告白するって小明と約束した（小明が勝手にしたんだけど。）

「せーんりー！」

「遅くなってゴメン！今日掃除でさ。今日は颯太とアツシと一緒だよ！」

「ほ～。さては、何かいいことあったでしょ？」

するとソーダが口を開いた。

「はい、オレ、山田颯太が英検受かりましたー！」

「おめでとー！ソーダ！」

「今日はどっか寄ろうぜ！」
とあっつん。

「と言うか、ソーダって俺も呼ぼっと！いいよな？ソーダ！」

「・・アツシは言い出すと聞かないからな・・。好きにしろ・・。」

「どこ行く？僕、ケーキ屋のクーポン今日もらったよ？」

「ナイス千里！私、新作のケーキ食べたかったの！」

「じゃあ行こうぜ！」

まさか、夢にも思ってなかったの。

裏切り、って言葉が身近にあるなんて・・・。

zelos04　Anri―友達―（後書き）

次回はアツシがメインの予定です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2800d/

affilizione―アッフリツィオーネ―

2010年10月10日02時43分発行